

氏 名	おお うち まさ とし 大 内 雅 利
学位(専攻分野)	博 士 (農 学)
学 位 記 番 号	論 農 博 第 2463 号
学位授与の日付	平 成 15 年 1 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 2 項 該 当
学位論文題目	戦後日本農村の社会変動と社会理論

論文調査委員	(主 査) 教 授 祖 田 修	教 授 野 田 公 夫	教 授 加 賀 爪 優
--------	--------------------	-------------	-------------

論 文 内 容 の 要 旨

序論はまず日本農業の現実を示し、それに対応するイエムラ理論の原型を明らかにし、課題を設定している。論文全体は2部で構成され、それぞれにおいてイエとムラの現実の変動を説明し、従来のイエムラ理論が新しい視点を必要としていることを示す。次いで変動するイエとムラを乗り越える理論的な視点を提示した。すなわち、イエとムラの双方において議論を深化させ、また拡張するため、イエに対しては家族を構成する個人へと降り、ムラに対しては都市さらには世界へと広げた。イエムラから、ミクロとマクロという正反対の方向へ議論を展開し、最後に総括する。

第1部「イエから個人へ」では、先に農家家族の変動を分析する。

第1章では、農業センサスを用いて農家家族の変動を家族員数の縮小から明らかにする。都道府県の農家規模はいずれも縮小したが、地域によって差がある。それは高度経済成長期の全国的な都市化の影響が、都市からの距離によって異なったからであるとする。

第2章では、集落のレベルで、農家個々の構造と機能の面において変動過程を追求した。農村人口の都市への流出は都市から遠隔の地において特に著しく、それはまず農家家族の構造に現れた。ついで農村への工場進出が始まり、雇用機会が増え、農家の兼業化が進んだ。この中での家族変動の地域差を、東北型(宮城型)、西南型(鹿児島型)、近畿型(滋賀型)と分け、その特徴を明らかにした。

第3章では、世代によってどのような家族生活を経験したかを扱う。福島県会津地方と熊本県菊池地方の2集落において、世代別、男女別に調査し、結婚の仕方や家族の中での役割の違いを明らかにしつつ、しかし全体としては高度成長下の体験は共通で、農家家族の変動も同一方向を示しているとした。

第4章では、家族変動を、さらにミクロに分析する。後継者個人のライフコース上の選択が極めて重要になり、決定的な意味をもつ。ライフコースは世代間で異なるばかりでなく、同じ世代内でも多様化を示すことなどを明らかにした。

第5章では、ライフコースの概念を、ライフサイクルとライフヒストリーに対照させて整理し、ライフコースを用いた農村社会分析の既存の成果を再検討している。そして昭和ヒトケタ世代の高齢化と退場は、戦後日本の農村社会システムの終了を意味するだろうと論じる。

第2部「ムラから世界へ」は、第1部と対照的な方向に議論を展開し、ムラから世界へとマクロの方向へ広げる。

第1章では、ムラの現実の変動を集落財政の変化から説明し、公と私の間接的な、いわば共の領域での財政であるとの見解を示している。

第2章では、都市から最も遠い地域における、人口減少、高齢化の進行を分析し、イエとムラの連動した社会体制の再生産が高齢者の引退によってしだいに困難になっていくことを明確にした。

第3章では、都市化の次に、近郊集落は農家と非農家の混住社会となり、都市と農村が同じ地域空間に並存あるいは対立し、それがムラを大きく変えたとする。そして都市化を過疎化、混住化、逆都市化の3段階に捉えている。

第4章では、この逆都市化という第3段階を取り上げ、主役は都市から農村に移り住む新来者であり、その背後には似た

ような意識をもつ多くの都市住民が控えていること、その都市人口を農村へと駆り立てたのは環境問題であるとする。その際、農なるものへのイデオロギーを、農本主義・近代主義・環境主義の3類型に分け、新来者の行動は環境主義によって説明している。

第5章では、現代の農村の社会変動は以上のような国内事情のみで説明できない。世界の動きが直ちに日本の農村に伝わり、個々の農業経営や農家家計に影響を及ぼす。混住化や逆都市化で遠くに見えた都市がしだいに迫り、次いで近年はその背後に世界の動きを感じなければならない時代となったことを明らかにしている。

最後の結論においては、「イエから個人へ」というミクロの方向と「ムラから世界へ」というマクロの方向を統合することを試み、その基底となるのは土地であるとする。個人、イエ、ムラ、都市、世界といった各層は、土地を共通の基底として、それを覆うように層化されている。土地へと帰ることによって、農村社会の理論も再び確かな基礎を得ることになるだろうとしている。

論文審査の結果の要旨

本論文は、戦後日本の農村社会学が、鈴木栄太郎、有賀喜左衛門らのイエムラ論を中心に理論展開したのに対して、新たな農村解明の手法を確立しようとしたものである。すなわち一方では「イエから個人へ」と考察の単位を降ろし、他方では「ムラから世界へ」と考察の場を拡大する中で、戦後農村の変化の実態とその意味を明らかにすることを課題としたものである。その際、個人の解明はライフコースの多様化、村の解明は都市化、グローバル化を軸として論理構成し、今後の方向を展望している。

評価すべき点は次のとおりである。

1. 農村社会学において従来中心をなしてきた鈴木栄太郎、有賀喜左衛門らのイエムラ理論の系譜を検討し、その限界を明確にして、新たな農村解明の理論的枠組みを構築したものである。
2. 農家家族の変動について考察し、主として高度成長下の家族員数の減少について注目し、その地域差が都市からの距離に関連していることを明らかにした。
3. ライフサイクル、ライフヒストリーの手法もあるが、個人のライフコースという新しい概念設定の下に、「選択」を伴う個人の積極的な生き方に注目し、その方向性が家族と村社会に大きな影響を与えたことを明らかにした。
4. 集落財政という、あまり考察されてこなかった領域を調査し、その内容の変化を見ることによって、「公」的と「私」的なものの間に、集落独自の「共」的な領域があることを指摘した。
5. 過疎集落と都市近郊の混住集落を調査・分析し、いずれもそれぞれの形で都市化、世界化の中に組み込まれていること、また都市が農村へ近づこうとする、新たな「逆都市化」の現象が見られることを明確にした。
6. 以上の所論を「土地」という場所性の上に総括し、「土地」を基底として現実が重層的に積み重なり、農村の実態を構成していると結論した。

以上のように本論文は戦後農村社会の変動の内容を、理論的に説明しようとし、新たな分析の枠組みを構想したものであり、農村社会学、農業経済学、農村発展論に寄与するところが大きい。

よって、本論文は博士（農学）の学位論文として価値あるものと認める。

なお、平成14年12月18日、論文並びにそれに関連した分野にわたり試問した結果、博士（農学）の学位を授与される学力が十分あるものと認めた。